日刊 動労千葉
87. 7. 18
No. 2605

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

国鉄「分割・民営化」反対！三里塚二期工事阻止！

いよいよ起ちあがる時が来た！

第二期労学校最終講座報告（下）

七月十一日、労働学校第二期最終講座で行われた佐藤芳夫氏の講演の報告に続いて中野委員長の講演の報告を掲載します。

「『新会社』は破産する」と講座を締めくくる中野委員長

おかしいことは主張する

最近、おかしな話が世界を駆巡っている。日本が大儲けしているのに労働者の懐は豊かにならない。東芝がココムに違反してアメリカの安全に危機をもたらしたという。

さらに、国会審議を開くというときに大臣がアメリカに行くというおかしなことが沢山生れている。

この中で一番大事なことは「こんなのはおかしい」と思うことだ。

今度の「分割・民営化」でも、「おかしい」というのが大変で、労働者の分裂や権利が奪われることが当り前になってきた。理の通らない非常に無理無体なことが進行し、それに労働者が一個の人格として、労働組合が労働者の集合体として「おかしい」と主張することが問われている。

そういう意味で動労千葉のやってきたことは、ごく当り前のことをやってきたにすぎない。労働者、労働組合の利益を守るために闘うことはあたりまえのことだ。その結果が労働者に利益をもたらしていく。

まともな労働運動を

四月一日、「新会社」が発足するときにわれわれは、「『4・1』は『分割・民営化』の本質を何一つ解決しないまま、新たな大破綻に向かって出発した日なんだ」と確認した。そして、この三ヵ月で鉄道労連の分裂という、中曽根の攻撃の最先端のところで大きな矛盾が爆発した。

鉄道労連から鉄労が分裂し、鉄産労と“ゆるやかな協議体”をつくろうとした。しかし、会社の首脳は、鉄道労連を育成しようとしている。

いずれにせよ、国鉄労働運動を叩き潰して労使協同宣言に代表されるような方針、一企業一組合＝産業報国会の狙いが、そのはじめでパンクしようとしている。われわれのチャンスである。

今回の分裂も、国労解体、雇用確保を掲げたものの結局は呉越同舟であり、いかに権力のしもべになるかを争った結果だ。四月に入ったら国労は五万人、動労千葉もほとんど「新会社」、さらに、佐藤、細田事件が発生して鉄労内で「動労は革マルだ」という声が表にでてきた。これに対して松崎は「志摩は組合費を着服している」とオルグしていたという。こういうレベルでやっていたのだ。では、松崎はなぜこの時期に飼い主（中曽根）の意向に反してここまでやったのか。まず、鉄労が動労の内部事情を知る、それを外部に暴露する。あるいは、松崎のスケジュールを暴露する。これではたまらない。だから強引に追い出したのだ。

また、今秋の全民労連移行の時に鉄道労連は、日本労働運動の孤児になってしまう。これ自身大きな矛盾になってくる。

こうなると労働者はまともな労働運動を進めていく以外にないのだ。

「新会社」は破産

「分割・民営化」破綻のひとつの特徴は、「新会社」全部が「黒字」計算をしているということだ。東日本で来年三月までの売上げが一兆五千億円、私鉄大手七社で年間八千億円。東日本一社で私鉄七社よりはるかに多い。このうち利益はいくらかというと二一五億円、率で一・五%。私鉄は三七〇億円で約四%になる。

では、なぜ売上げがこんなにあるのに利益がすくないのか

三兆四千億円の長期債務があり、年間利息は約七%で二千三百億円、さらに、新幹線リース料を二千億円払う。一兆五千億円のうち約三分一の四千三百

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！

億円を借金の返済にあてる。しかも利子だけで、元金は返さない。

人件費も三〇％位で非常に低い。国鉄時代は約八〇％だった。（退職金を含む）

かりに今年度二百億円「黒字」になったとしても、これから三〇年間綱渡りをしなければならないのだ。

私鉄との違いは、五〇％が関連事業ー不動産、デパートなどであげていることだ。「新会社」は五％弱である。

私鉄でも鉄道だけでは儲かるわけがなく、関連事業で成り立っている。組合の活動家をもっていくというやり方はしていない。

これとは逆に東日本は、強権的労務政策だけが先行しており、これでは利益をあげることにならない。破産するしかないのだ。

出向にはストライキ

もうひとつは、職場から活動家を一掃しようとしていることだ。東京では、七〇名中五〇名が国労で、業務命令で強行されている。東日本では千葉を除いて全て出向に出されている。

あまりに一方的な出向のため労働委員会も「命令を『凍結』しなさい」という勧告を出している。しかし、会社は勧告を無視したため、労働委員会が怒っているそうだ。国労も闘いをなにもやらず、このチャンスに闘わずにいつ闘おうというのだろうか。

千葉は表向き「夏期輸送」で人が足りないという理由だが、広域募集で四百人が東日本に来ると千葉でもいよいよ出向が始まる。しかし、今までやれなかったのは動労千葉がいたからだ。

国労は攻撃をかけても抵抗しない、そこにいくと動労千葉は、なにをやるかわからないという恐怖感を与えている。なめられたらダメなんだ。

八月以降くる出向攻撃にはストライキも辞さず闘う方針を確立する。理不尽なことは絶対認めない。

さらに、組合員も「出向はイヤだ」と言わなければならない。ここから出発するのだ。

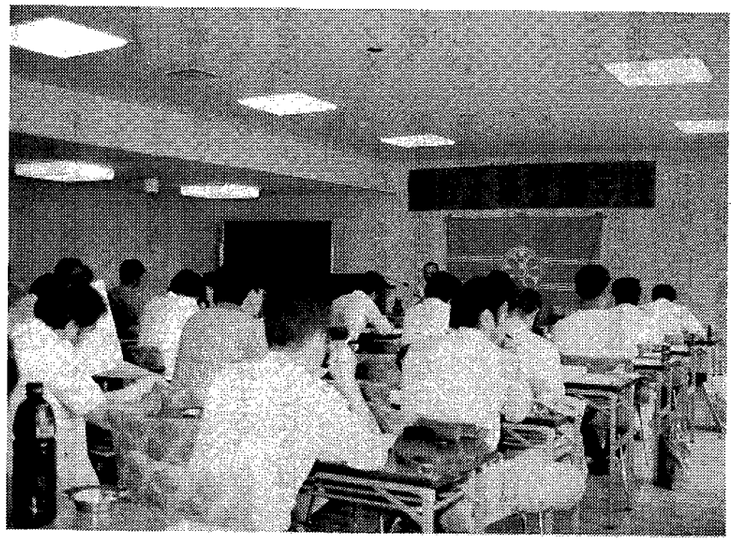
敵の攻撃がはっきりしているいじょう、いよいよ闘いに起ちあがることを決意しよう。差別をやらせないためには、闘って力関係をつくるいがいにないのだ。

民間のノウハウを学ぶ

また、現在こうしているのも、二八名の解雇者、一二名の清算事業団の仲間、さらに、七〇名からの仲間が営業にいっても頑張っているからだ。この連帯感がなければ闘えないのだ。動労千葉はそういう意味でもものわかりのいい組合になろうとはおもっていない。

一番有利なことは、ストをやっても処分をうけないということだ。解雇がないということだ。当局も色々組合があってロックアウトは難しい。協約・協定も結んでいないからすべてフリーだ。

労働者に不利なものはむすばない、これが基本なのだ。国労は協約を結んだためストができないということがおこっている。

ストライキを実現させるために、民間の闘いのノウハウを学びやっていこう。

いよいよ起ちあがる時が来たのだ。